

識者評論

三菱自不正問題

小宮 一慶
経営コンサルタント



こみや・かずよし 1957年
堺市生まれ。京都大卒。東京銀行
に入行。岡本アソシエイツ取締役
などを経て、小宮コンサルタンツ
を設立。

する認識が薄かったのだ。ないし、働く人も幸せに
ろつ。こういう会社は往はなれない。

三菱自動車が日産自動車の下に入るようになった。日産が3分の1強の株式を取得し、経営をコントロールしていく。日産にとっては軽自動車とともに、東南アジアで強みを持つ三菱自の流通網を持てるメリットは大きい。カルロス・ゴーン日産社長は「ウィンウィンだ」と記者会見で述べていたが、三菱自にとっても良い結果となったと思う。同時に私は、この一連の流れを見て、不正を働く会社の末路を見たような気もした。

経営学者のドラッカーは「法律というものは世の中の人たちが平和に暮らすために最低限守らなければならぬルール」だとし、それすら守れない企業は「社会での存在を許されない」と言っている。

三菱自の社内では、法律を守るといふことに対

企業目的忘れた末路

する認識が薄かったのだらう。こういう会社は往々にして、「目的」と「目標」を取り違えていることが多い。企業の目的（存在意義）の二つは、独自の商品やサービスを提供して社会に貢献すること。もう一つは会社で働く人々たちを生かし幸せにすることだ。多くの会社では理念やビジョン、ミッションとして掲げているものだ。ところが三菱自の経営陣はこの目的を忘れてしまった。

ないし、働く人も幸せにはなれない。

もう一つ気になったことは、ドイツ自動車大手フォルクスワーゲン（VW）の排ガス問題があのころまで大きく取り上げられていた昨秋、日産に指摘されて問題が明らかにになったにもかかわらず、トップが最近までそのことを知らなかったことだ。これはコミュニケーションの悪さで片づけられる問題ではない。問題の根が極めて深いことを

目的がきちんとできていれば、目標である売上高や利益は出るはずだが、順法精神が薄い企業では目標が目的化する。ひどい決算を發表した東芝も同じだ。そうならない商品やサービスも出て、グループ全体への

意味している。企業体質が正常でないのだ。こんな状況では前回2度の不祥事同様、三菱グループが支えたところで企業体質はさほど変わらない。三菱グループとしても、グループ全体への

評判もあり、今回は支援を見送ったのだろう。

三菱自は今回、日産の傘下に入ることで、大幅にこれまでのやり方を変えなければならぬはずだ。それは三菱自にとっても、顧客にとっても、従業員にとっても、そして社会にとっても良いことだと思つう。

ただ、それでも心配は残る。2006年に花王がカネボウの化粧品部門を4千億円以上の資金を出して買収した。化粧品はブランドが大きな位置付けを占めるので、カネボウの経営にある程度の自主性を持たせたせいで、美白化粧品で皮膚がまだらに白くなる白斑問題が起こった。今後、日産が三菱自というブランドを残しながらも、間違った社風や考え方をどれだけ変えていけるかが重要だろう。

ドラッカーは、企業が存在だけでなく「存続」を許されるのは、社会に対して良い商品やサービスを出し続けられるかどうかにかかっていると言っている。三菱自が日産の下で、顧客が喜び、従業員も生かされる会社となることを願ってやまない。